連載「TUNAGO」第２回【対談】阪本繁紀さん×スターズアーツ・本宮透雄理事長～防災×エンタメで新たな価値創造へ～

6

「ある光」製作委員会
2025年4月20日 11:45

東日本大震災を史実に沿って伝える漫画「ある光」の舞台化に向け、原作者の阪本繁紀さんと、同震災の被災証言の伝承に取り組んできたＮＰＯ法人スターズアーツ（東京都港区、本宮透雄理事長）が強力なタッグを組みました。連載「ＴＵＮＡＧＯ」第２回では阪本さんと本宮理事長の対談を通し、両者の共通項や舞台化プロジェクト始動の背景、今後の展望などを掘り下げます。

阪本さん㊧と本宮理事長

スターズアーツのこれまで

阪本　本宮さんは長く舞台演出の分野で経験を積まれてきたと伺っています。それが現在は、東京大学生産技術研究所附属災害対策トレーニングセンター(ＤＭＴＣ)で災害対策士Ｃ級を取得されるなど、防災を最大のテーマに活動されていると聞きました。きっかけはやはり、東日本大震災だったのでしょうか？

本宮　はい。テレビで見た津波の映像が今も強く印象に残っています。お子様ががれきの中で立ち尽くしている映像に報道で触れ、ショックを受けました。**「ご両親が被災されたことで教育機会を失う子供を、一人でも減らしたい」との思いで、団体を立ち上げ、募金を教育支援の団体に送金する活動に着手しました。**

活動の経緯を説明する本宮理事長

阪本　それがスターズアーツの出発点だったのですね。一方で現在は「forever～決して忘れてはいけないあの時～」をはじめ、**舞台演出の手法を活用した被災証言の伝承を、活動の軸に据えています。**活動を教育支援から、被災証言の伝承という形に切り替えたのはどうしてですか？

本宮　教育支援を続ける中で、「あと30分早く逃げれば、あの子の両親は助かったのに」といった思いを抱くケースが多くありました。「目の前の子供たちを助けるだけでなく、**もっと川上の段階から防災意識の醸成のような形でアプローチし、未然に被害を減らせないか**」と考え始めました。そんな中、東北大学が運営する被災証言アーカイブ「**みちのく震録伝**」に出会いました。

　アーカイブには被災したことを伝えるだけでなく「どうしてこういうことが起きたのか」とか「今後はどうすればいいのか」といった、**防災を考える上でのヒントを与えてくれる証言が多くありました。大きな刺激を受けて、証言を伝承する活動へとシフトしていきました。**

2023年８月に文京シビックホール（東京都文京区）で開催した「forever ～決して忘れてはいけない あの時～2023刻キザム」の様子（スターズアーツ提供）

阪本　それ以来10年以上にわたって、伝承の取り組みを続けていますね。

本宮　はい。例えば復興支援イベントのような一時的な催しで、防災意識を高めてもらうには限界があると思います。**被災者の方々の証言に寄り添い、発信を後押しする。それを長く継続することで、聞く人の意識を少しずつ変えていけるのではと考えています。**

防災は、個人個人で主体的に考えてもらう必要があります。健常者と障害者では、防災を考える上での条件は異なります。自宅で震災に遭えば備蓄してある物が使えますが、出先で遭えば使えません。

個々人で日頃から「今震災に遭ったらどうすればいいか」を考えておくことが必要です。被災証言の伝承を通じて聞く人にイメージを膨らませてもらい、こうした「生きるすべ」の再確認につなげてほしいと考えています。

「ある光」との共通項～「生きるすべ」の再確認～

阪本　そんなスターズアーツ様が「ある光」に目を留め、舞台化を打診してくださいました。

本宮　「ある光」の舞台となった福島県いわき市薄磯地区では、地震・津波災害で100人以上の方が亡くなりました。まちは大きな痛手を負いつつも、2020年ごろまでにハード面の復興を終え、新たな装いの下で再生に向けて歩みを進めています。

防災緑地が整備された薄磯地区（阪本さん提供）

「ある光」で注目すべきは、この復興と再生を、主人公の生き方や人生観に落とし込み、没入と共感を可能にしている点です。

災害列島の上で営まれるこの社会で、多くの人が見落としてしまっているかもしれない「生きるすべ」を見直すための、新たな切り口だと感じました。私たちのアンテナに引っかかり、これを舞台上で表現してみたいと思ったのです。

復興で姿を変えた薄磯地区を見つめる佳文（「ある光」より）

阪本　「生きるすべ」の再確認という面で、スターズアーツ様と方向性が一致したということですね。

これは主観になりますが、一般的に「防災」といった場合、家具を固定するとか、非常用持ち出し袋を用意するといった短期的な面に焦点が当たりがちな気がします。しかし被災後の生活再建や復興は、10年以上のスパンで続く息の長い取り組みです。傷ついた心を立ち直らせ、再び前を向いて生きていくにも長い時間がかかります。

主人公の佳文（かや）は震災で家族や友人を亡くし、深く傷つきます。それでも涙を拭い、前を向いて生きようと努力します。その姿勢は、もしかすると今後自然災害で被災する人が中長期的な「生きるすべ」を考える上でのヒントになりえるのかもしれませんね。

本宮　「生きるすべ」にはさまざまな側面があります。私は「生きるすべ」とは**「自助」**、つまり自分が助かることが第一だと思います。まず震災を生き延びなければなりません。

　その上で佳文は、宮田くんが亡くなったからバイクを受け継ごうとか、美咲が夢を諦めたから自分が頑張ろうとか、いろいろなことに取り組みます。**「生きるすべ」を考える上で、「自助」の一歩先を見せてくれる物語だと思います。**

舞台化に向けて

阪本　脚本家・演出家に**村上秀樹さん**を起用されました。どういった狙いで村上さんに依頼されたのですか？

本宮　村上さんはいわき市のご出身です。地域のことを熟知されていて、キャラクターへの共感も強い物があります。こうした背景は、せりふの選び方など表現の機微に現れてきます。**漫画をどうやって舞台の形で見せるか。村上さんはかなりこだわって、照明や間（ま）などを検討してくれています。今から楽しみです。**

阪本　「ある光」、どんな舞台になると思いますか？

本宮　現在は漫画をベースにした脚本・演出案ができた段階です。今後スタッフを交えて作り込んでいくので、今の時点で具体的に「こんな舞台になる」と示すのは難しいのが正直なところです。

舞台化への抱負を語る本宮理事長

ただやはり、**大空に向かって飛び立つロケットのような、大きな「軌道」を描きたいと思っています。**舞台はスタッフの皆さんや出演者の皆さんが化学反応して、どんどん姿を変えていく物です。うまく反応すれば、ロケットはどんどん上がっていきます。

防災とエンターテインメントを掛け合わせた、新しい価値の創造。みんなで力を合わせて、実現に結びつけたいと思います。（文・舞台公演「ある光」製作委員会事務局、写真・**千悠**）

本宮透雄（もとみや・ゆきお）1964.1—

日本大学芸術学部勤務
ＮＰＯ法人スターズアーツ理事長
ＮＰＯ法人日本ドミノ協会理事長

専門分野
舞台照明（演劇、日本舞踊）、日本劇場史、民俗芸能、沖縄組踊

経歴
東京都中野区出身
1985年日本大学芸術学部卒、コープサービス芸能部入社
　演歌歌手（吉幾三、森進一、石川さゆり、北島三郎など）やお笑い芸人（三遊亭円歌、海老一染之助染太郎、ケーシー高峰など）、講演会（遠藤実、ケーシー高峰、三遊亭円歌など）のプロデュースを手掛ける
1989年日本大学芸術学部入職（技術職員）
2002年ＮＰＯ法人日本ドミノ協会設立、副理事長に就任
2011年任意団体スターズアーツ設立
2017年日本ドミノ協会理事長に就任
2022年スターズアーツをＮＰＯ法人に移行、理事長就任
2024年防災士、東京都防災コ—ディネーター取得
2025年東京都災害時支援ボランティア（練馬区）登録、東京大学生産技術研究所附属災害対策トレーニングセンター(ＤＭＴＣ)災害対策士Ｃ級取得